

## 金沢貞顕文書の医史学的研究

樋口 誠太郎

### 一、はじめに

金沢貞顕かねさわ（弘安元年・一二七八〜元弘三年・一三三三）は、称名寺（真言律宗・別格本山・西大寺末）の創設者である北条実時の孫に当たる・鎌倉時代末期の武將として知られている人物である。

彼の父、北条顕時は、安達一族を滅亡させた「霜月騒動」（弘安八・一二八五）に連座し、下総国埴生はぶのしよう荘（現・千葉県印旛郡栄町から成田市の一部）に流された。<sup>①</sup>

しかし、貞顕は金沢北条氏の当主として、また執権北条氏の一族として、早くから幕府内の要職に就いている。たとえば彼は、六波羅探題として、十年以上も京都に滞在した。彼が「金沢文庫」の充実に力を入れたのもこうした京都での生活で修得した学問・文化がバックボーンとなっていたことであろう。

また政治面では、わずかの期間ではあるが鎌倉幕府の執権職をつとめたこともあった。その後出家して法名を崇顕と称し、その後、元弘三年に建武中興の争乱の中で、北条一門と共に鎌倉東勝寺で自刃して果てた。<sup>②</sup>

なお「金沢文庫」のある「称名寺」は、北条義時の孫であった北条実時が武蔵国金沢郷に住み別荘を建てた時に堂宇を建立したのがはじまりで、実際には金沢貞顕の時代が「称名寺」の荘大な伽藍が整備され、「金沢文庫」の充実がはか

られた時で同時に金沢北条氏の最盛期であったとも言われる。

また当寺は「金沢山称名寺」と言つて、真言律宗別格本山で西大寺末とされ、金沢北条氏の菩提寺でもある。くわしいことは判らないが、当寺は北条実時が六浦荘金沢の居館に営んだ持仏堂から興つたと言われている。初代長老は審海、二代劔阿、三代湛睿と学識すぐれた高僧がその地位についたため、「金沢学校」と言われるほど、広くその存在を知られた。

私がここでとりあげたのは「金沢文庫」に残っている金沢貞顕から二代長老劔阿に宛てた書状（『宝寿抄』紙背文書）の中から当時の医療や祈禱に関するものを中心にとりあげ、金沢貞顕のような上級の武士が病気をどのように見て対応していたか、当時の人びとの生活の中における宗教（社寺への信心）の重みづけを調べてみたものである。

こうしたことについては、かつて服部敏良氏が『鎌倉時代医学史の研究』の中で「金沢文庫古文書の医学的考察」（第二章第五節）と題してとりあげておられるが当時は『金沢文庫資料図録』のように整理されたものがなかったので、くわしくとりあげるといふ面では服部氏御自身でも意に充たなかつたのではと思う。

本稿は、今回刊行された『図録』を活用して金沢貞顕と劔阿との書状のやりとりの中から当時、病氣・医薬・祈禱に関することがらをまとめて見たものである。

## 二、『宝寿抄』と、紙背文書

称名寺二代長老明忍房劔阿は、金沢貞顕と公私の両面で、密接な関係をもっていた。

平成四年三月に刊行された『金沢文庫資料図録・資料編Ⅰ』には『宝寿抄』の紙背文書として、金沢貞顕が劔阿に宛てた書状類が多く見られる。その多くが私信で、家族の病氣について劔阿に祈禱を依頼したものやその病状の経過を伝えたりしたものとか劔阿の病氣に対しての見舞、薬物の贈答につけた書状などがあり、鎌倉時代末期の上級の武家が



写真1 『宝寿抄』（金沢文庫資料図録より）

自分や家族の病気に対してどのような療法をとっていたか、病氣と祈禱との関係などいろいろなことが判る。

金沢貞顕は、子息の貞将・顕助の病氣、貞将の妻の出産、執権北条高時の病氣への心配などに対する細かい心くばりをする武家であることに気付く。

また療法としては、湯本への湯治、灸治、薬湯の服用について、

この時代の特色を知ることができる。

一方、菩提寺の僧侶に対して祈禱を要請し、神仏に対し病氣治癒を祈ってもらう、看病する家族は安堵感をもつことができるというもので、金沢貞顕の書状から見るとかなりの名医にかかっているも、称名寺長老劔阿に病氣治癒の祈禱を要請している。

ところで前置きとして、この書状が書かれている『宝寿抄』について簡単にふれておきたい。この『宝寿抄』は劔阿が所持していた全十二巻の仏教書で、写真1に見られるように不動明王の尊像を豊富に描き、説明した仏教書を、劔阿が書写したものである。当時は紙が貴重であったので、自分の処へ来た書状の裏を利用した。それに金沢貞顕の処から来た書状が多かったということ、その理由は称名寺と金沢氏の関係が深かったためであろう。

また『宝寿抄』というのは、陸奥国岩城郡（福島県いわき市）の

薬王寺宝寿院にて永仁三年（一二九五）三月に禅意が真源に口伝えして、真源がこれを筆録したもので、伝授した寺院の名をとって、『宝寿抄』の名が付けられたといふ。<sup>③</sup>

筆録者である真源は信濃国の出身で、奈良・西大寺の叡尊の弟子となり正応三年（一二九〇）頃に西大寺から関東に下り永仁二年（一二九四）に『宝寿抄』を叡尊の弟子禅意から伝授され、下総国大須賀保（千葉県香取郡大栄町）の地頭大須賀氏の外護のもとに慈恩寺の中興開山となった人物として知られている。<sup>④</sup>

### 三、金沢北条氏について

金沢北条氏は、前にも述べたとおり北条義時の孫、実時が武蔵国六浦荘金沢郷に別荘を営み、ここに「金沢文庫」を作った。

実時は（元仁元年）<sup>①</sup>（建治二年）<sup>②</sup>北条実泰の子で、幕府の引付衆、評定衆などの要職をつとめた。他方「金沢文庫」創設に見られるように学問好きで、多くの古典籍を収集したりした文人武將の代表的人物のひとりである。

北条一門の中における金沢氏の系譜は次頁に示した表1のとおりである。

また前にもふれたように、北条実時は六浦荘金沢の居館内に持仏堂を営み、これが「金沢山称名寺」となった。金沢北条氏のはじまりは北条実時からだとされている。

### 四、金沢貞顕文書に見る祈禱と医療

前述の実時の孫である金沢貞顕が称名寺長老老劔阿などに宛てた書状が『金沢文庫資料図録』書状編1に『宝寿抄』の紙背文書として沢山含まれている。それは公的なものより私的なものが多いということが当時の上級武士の私生活を知る上で役に立つ。特に医史学的な視点から見ると注目すべきものが多い。



これを整理して見ると金沢貞顕が自分自身の病気に悩み、劍阿に相談したり祈禱を依頼しているもの、子息貞将の病氣、貞将の妻と思われる女性の出産の事などを劍阿に告げたものもあり、次にあげた表2のように二十八通存在する。

この表2を見ると金沢貞顕も子息貞将もかなり病氣をしている。武士であるので幼少の頃から弓馬の道に励み身体を鍛えていたと思うが、丈夫とばかりは言えないようである。

特に、貞将の健康状態を告げる書状が意外に多く(表2の中の1・6・11・12・13・18)持病があつて、療病に苦心している。一例として写真2に見られるように「持病療養湯本下向……(下略)」とあり、箱根湯本へ湯治に行つてゐる。湯治は民間療法のひとつで、現在の入浴のように湯に全身をひたす方式のものである。なお当時「風呂」というのは釜で湯をわかし、浴室に蒸氣を送り込む現在のサウナ風呂のようなものであつた。これは当時の絵巻物などに描かれている。また次に掲げた金沢貞顕の書状(断簡)を見ると、貞顕が自分か家族の病氣に対して医者(診察)を受けたり祈禱を依頼している様子が良く書かれている。

史料一 金沢貞顕書状(断簡)

『金沢文庫資料図録・38頁』

(読み下し)

七日夜より<sup>(病悉)</sup>違例事候しか／一昨日より<sup>(ひどくなつた)</sup>増氣候て、以外候つる／を長周朝臣療を加え候<sup>(熱)</sup>温氣／ハすこしかろくなりて候食／事もつや<sup>(いよいよ)</sup>く<sup>(め)</sup>され候ハす、身も／くるしくて候、祈禱事、殊／御意ニかけられ候ハ、本意候／去年の所労と同躰ニ候、それよりハ／かろく候、医師も<sup>(こと)</sup>殊なる事／候ハしと申候之間、安堵して候、／此事ニより候て、御出ハあるま(以下断)

表2 金沢貞顕文書に見る医事関係記事

頁々金沢文庫資料図録書状編1の掲載頁を示す。

No.	頁	内 容	年月日	花押
8	88	(略)自廿五日雖令出土候猶腰勞難治候、悉得減氣候者、毎事可……	不明 七月廿九日	不明
7	20	枳餅一葛令進之候 (枳餅は整腸・健胃剤)	不明 三月六日	花押 アリ
6	68	昨日御報委細承候了 貞将祈禱事御無沙汰之条諸医等昨日来臨候し……減気	不明	不明 断簡
5	60	御腹気無為之由昨日承候之間喜悅無極候	年代不明 七月廿日	花押 アリ
4	52	御違例事夜程何様御坐候哉無心本存候	年代不明 六月廿九日	花押 アリ
3	41	頭助法印芳、只同躰候、祈禱事被入御意候之由	不明	不明 断簡
2	38	七日夜より違例事候しか自一昨日増氣候て長周朝臣(丹波)加療治候か	不明	不明 断簡
1	21	持病療養ノ為湯本へ下向	年代不明 九月十三日	花押 アリ

No.	頁	内 容	年月日	花押
16	121	御目御勞其後何様御座候哉	○同右 元応二年か 七月十三日	花押 アリ
15	119	○貞顕より劔阿への見舞状御違例事其後何様御座候哉、無心本相存候	七月六日	花押 アリ
14	114	(前略)小童等所勞、得少減候之際喜悅候、一向御祈念之故候之由	三月十六日	花押 アリ
13	106	貞将所勞事、次第得減氣候間悦思給候	五月七日	花押 アリ
12	105	貞将自云(十)二日相勞候か今日十五日子剋以外わつらハしく候之間(略)祈禱之事	十二月 十五日子剋	花押 アリ
11	100	自昨日夕方貞将所勞之事以外難治候御祈念候者悦入候、甘葛事先日承候……	五月四日	花押 アリ
10	94	昨日令申候息女所勞事心苦躰ニ候兩三日も加持仕候ハヤ(中略)医師ハ昨日も見候て一向中風之由令申候	不明 八月廿八日	不明 断簡
9	87	金堂材木事(中略)路次の際疲惱さこそ候つらめと察覚候て	不明	不明 断簡

No.	17	18	19	20	21	22
頁	130	139	143	160	161	162
内容	頭助労取延たるやらニハ候へとも未心苦之由承候……又小童勞事	○貞頭より見舞状候 御痢病御再発之由承候、(略)能々可有御療治候、又貞將所勞大事物にて候	(前略)柳貞將妻女 自一昨日廿日違例事候医師者不可有子細之由雖申之候食事減少候之間……	(前略)兼又此三日風氣候、以外候間今日評定不及出仕……	其後何条御事候哉 此勞次第得少減候之間 リンゴ文中にあり	男子出生(貞頭の孫か)以後只今辰刻まで無殊事候、但後物いまに遅々候、医師ハくるしからず
年月日	文保元年か 三月八日	文保元年 三月中旬か	不明	二月十六日	七月十六日	正月十一日
花押	花押 アリ	花押 ナシ 断簡	花押 ナシ 断簡	花押 アリ	花押 アリ	花押 アリ

No.	23	24	25	26	27	28
頁	163	165	180	189	190	213
内容	西御門殿自去夜御違例之由只今承候	小童身固事此人申入旨候……	小童心くるしきよし承候(中略)貞將ハ只今ハしつまりて候……	(北条高時) 太守自動廿二日朝御違例事候、昨日者御少減之由承之候しか……	去夜御報慥拜見候了祈事御始行返く悦入候、其後医師等來臨候て加療治候之間しつまり	大仏の入道自昨日所勞の候か今朝以外ニ大事ニ候之由只今つけたひて候程にまかり向候……
年月日	極月九日	三月廿九日	三カ ( ) 月十六日	文保元年 三月以降 のこと	不明	文保元応の 頃か、 十月六日
花押	花押 アリ	花押 アリ	花押 アリ	断簡	断簡	花押 アリ





写真2 湯本療養の書状 (表2、No.1)

『鎌倉時代医学史の研究』(服部敏良氏著)によると、史料一の中に見られる長周朝臣というのは、当時鎌倉にいた施薬院使丹波長周のことで、このような高名な医師に診療してもらえるのは、北条一門の高級武将の一家であったからであろう。しかし医師は大したことはないと言っている。貞顕の書状の中にはこのような例は、表2中の6・10・22・27などにも見られる。貞顕の書状の中には病気にかかった娘のため医者の診療を受け、更に劔阿に祈禱をしてもらったりして看病の様子が良く判るものがある。(表2中の10)

史料二、金沢貞顕書状 『金沢文庫資料図録・94頁』

(追記)

医師は昨日も

見候て一向中風之由

令レ申候

昨日申せ令候息女所勞の事／心苦しき体に候。兩三日も加持仕候ハヤと／存候、觀達御房入御候ハつ悦ニ入候、／雨中之路次つし定めて難治の御事に候ぬと／存候へとも、片時もいそ念き思し給い候之間、馳せ申さしめ候、其外も僧一兩人御渡り候て、／陀羅尼をもみてさせ給候ハ、／悦び存じ候、人数は御計はからい有るべく候、又／祈禱事、御意に入られ候之由、／昨日の御返事に承り候。殊ニ悦び思い中斷 本望に候、雨中返々不心ニ候へ／とも、明日者重日じゅうにちに候、今日中ニ／觀公入御候わば悦び存じ候。恐惶謹言

八月廿八日

貞顕

(劔阿)  
方丈進之候

『資料図録』の中の解説によると当時四歳程度の幼児であった貞頭の娘の病気に對して、觀達房に鎌倉に来て加持祈禱してほしいと劔阿に依頼した書状で、追而書に医者は「中風」(現在の風邪のこと)だとおっしゃっていると書いています。昔は幼児の死亡率が高かったので、貞頭が心配している様子が良く判る。

また写真3は「柝餅一葛…」進上の貞頭から劔阿宛の書状である。柝餅とは柝の実の餅のことで『和漢三才図会』によれば、整腸、健胃剤として、民間療法に用いられていたとある。劔阿は胃腸が弱かったのであろう。貞頭の心からのおくりものであつて、両者の關係を良く示したものと見えよう。

このような民間療法の薬物が出てくる書状に写真4の金沢貞頭より劔阿に宛てたのがある。書状の内容は概略次のとおりである。

昨日夕方より貞將所<sup>(病室)</sup>勞の事ニ候、以つて外難治ニ候、御祈念候はば悦び入り候、其の間の子細は使者を以て申さしめ候、兼ねて又甘葛<sup>あまづる</sup>の事、先日承り候し、所持せず候の間相尋ね候、処少分尋ね出し候程ニこれを進らしめ候。恐惶謹言

五月四日

貞頭(花押)

(劔阿)  
方丈進之候

これも貞將の病氣の様子を劔阿に伝えて以外になおらないので、祈禱を依



写真3 金沢貞頭・劔阿宛書状

頼している。

甘葛あまからは松や杉などの高木にからむ蔓草つるくさの一種「あまちやづる」と言われるもので、この茎を煮つめた甘い汁は砂糖の代用としても用いられると共に、薬物として用いられた。この場合は薬物として用いたようであるし、かなり入手に苦勞したような文面が伺われる。

また金沢貞頭は称名寺長老劔阿の病氣に対してもいろいろと病氣見舞状を出している。表2にあげた二十八点の書状の中でも五点ほどある。中でもNo.16の劔阿の眼病に対する見舞状、No.18劔阿が痲病（下痢か）を再発したことに対する見舞状など劔阿という人物の健康状態を知る資料として貴重なものである。

写真5、が金沢貞頭が眼病を患った劔阿へあてて、その様子をたずねた見舞状である。「御目の御勞いたわり、其の後何様いかさまに

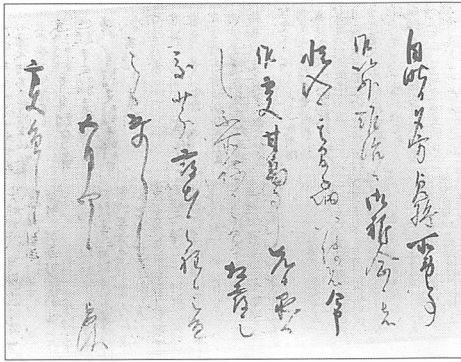


写真4 金沢貞頭・劔阿宛書状

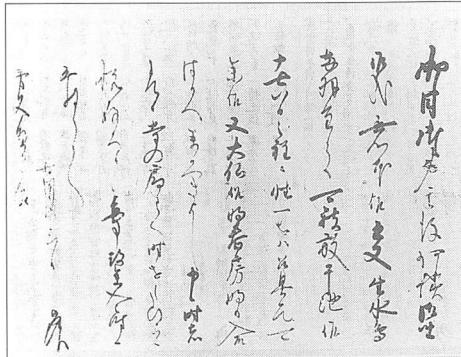


写真5 金沢貞頭～劔阿宛書状

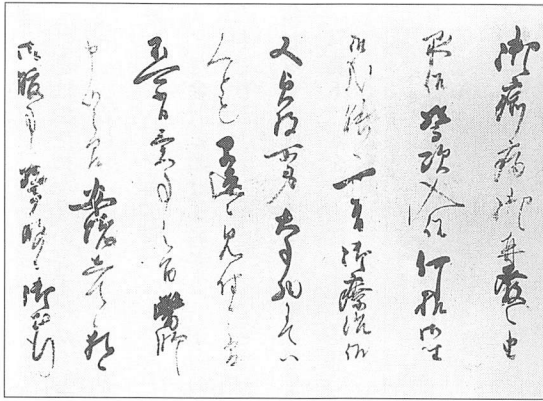


写真6 金沢貞顕～劔阿宛書状

御座／候哉、心本なく候、兼ねて又生水鳥／両羽これを進候、池に放たるべく候／十七、八日の程に性一をば召し具し候て／参るべく候、又大仏二候明春房明日入殿／はかへ参り候べきよし申候、(以下略)。」

この書状は劔阿の眼病の見舞と共に称名寺の池に水鳥を放してほしいとか、大仏の明春房が入殿(貞顕の祖母のことか)の墓参に明日行くからその時に食事を出してやって寺の局で食べさせてやってほしいなどと頼んでいる。なお文中に「十七、八日の程に性一をば召し具し候て…」とある中の性一は、称名寺の池を造成した責任者のことのようにある。

また劔阿が胃腸が丈夫でなかったらしいことは、前の写真3の「析餅一葛…」のところで述べたが、写真6に見られる内容ははつきりと「御痲病御再発の由／承り候、驚き入り候、何様に御座／候哉、能々御療治あるべく候／又貞将所労、大事の物にてハ／候へども(以下略)」。胃腸を悪くしている様子を案じた貞顕の見舞の辞が綴られている。またこの書状の後の方には貞将の病気のことも伝え、医師が大したことはないと言っていると述べている。医師によくかかっているのは、やはり当時としては上級武士の一家であったからこそ可能であったのであろう。

次に貞顕の書状のもう一つの面を構成するのは、家族(子息の貞将以外)である妻女とか子どもたち(小童)という表現で書かれている書状がいくつかある。たとえば当時は子ども健康保持のため「身固め」という加持祈禱を行った。

写真7は、それを劔阿に依頼した貞顕の書状である。

また同一人かどうかは判らないが貞顕の劔阿宛ての書状の中に「小童(子ども)の病気の様子を伝え、観達房に病気が小康状態になるまで加持祈禱をしてほしいということ劔阿に依頼しているものもある。なおこの書状(表2・



写真7 「小童身固め」の書状・貞頭～劔阿宛

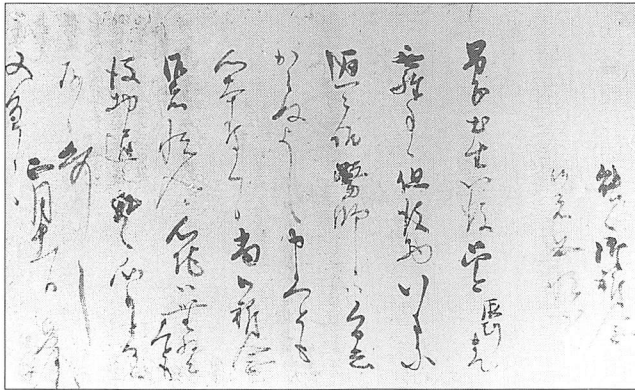


写真8 「男子出生……」と貞頭～劔阿へ孫の出生を伝える書状

No.25)には、貞将も病気をしていたが回復し、劔阿の来訪を知り喜んでいることが追而書きに記されている。また写真8に見られるような孫の出生を伝える書状もある(表?・No.22)。全体的に見て出生を報告する書状というものは、このように出産の状況までくわしく伝え祈禱を依頼したものは珍らしいといつて良いであろう。

内容は次のとおりである。

男子出生以後只今辰剋まで／殊なることなく候、但後物(後産)いまだ／遅々候、医師ハくるし／からぬよし申候へとも／心本(こころもと)なく候、尚御祈念／候はば悦び入り候心地ハ無為に候へとも／後物遅々かえすがえすも心もとなく／存じ候、恐惶謹言

(追而)

能々御祈念／候はば恐悦ニ候

正月十一日

貞 顕 (花押)

又進之候

これは、貞顕が嫡孫の忠時の誕生を劔阿に伝えると同時に母親の後産の遅れを案じ、医師が大丈夫と言っているのに、劔阿に祈禱をしてほしいと頼んでいるものである。医学が発達していなかった当時、出産は死の契機ともなりかねないものであった。貞顕の書状は、こうした事態を背景にして家族への細やかな心配りがにじみ出ている。図録の解説によると、文保二年以降(一一三一—一一三八)、一〜二年の間のことであろうと推定している。

またこのような家族の健康状態を伝え、祈禱を依頼する書状の中に、「息女所労事…」とか「貞将妻女自二昨日廿日一違例事ニ候」などというように女性のことが記されていることは注目して良いことであろう。当時女性は大切にされていた。このことは貞顕の書状の中に良くあらわれている。

## 五、おわりに

金沢貞顕という鎌倉時代末期の武將は執権北条氏の一族として、恵まれた上級武士であった。したがって自分も家族も病氣になった時には医師によくかかっている。このことは称名寺長老劔阿に宛てた書状からも判る。また当時は病氣

は疫神や悪霊によってもたらされると信じられていたので、僧侶に加持祈禱をしてもらい邪気を払いのけることが早く健康になる唯一の方法と考えられていた。劔阿に宛てた貞顕や嫡子貞将の書状の中に病気を伝え祈禱をしてもらいたいという文面のものが多いのは、こうしたことが理由だからであろう。

鎌倉時代後期の上級武士の家の家庭生活で家族がどのような病気を患って、どのような医療行為(加持祈禱なども含めて)が行なわれたかということが金沢貞顕・貞将父子の書状に良く記されている。また一方では金沢貞顕の書状から、その人間像などが良くあらわれている。このようにまとまった史料が存在することは珍しいことでもあるので、ここに整理して医療という面からまとめしてみたものである。

なお『金沢文庫資料図録』の中には、この外にも(金沢貞顕の書状以外のものにも)、医事資料として見るべきものが沢山入っているが、今回はここでとりあげてはいない。

#### 註

- (1) 金沢貞顕書状案・弘安八年十二月付、『神奈川県史』資料編2
- (2) 執権北条氏一門鎌倉東勝寺で自刃、『鎌倉市史』総説編
- (3) 宝寿抄の名称について、『金沢文庫資料図録』二二〇頁
- (4) 真源について、同 右

#### 参考文献

鎌倉時代医学史の研究 服部敏良

神奈川県史

鎌倉市史

金沢文庫資料図録書状編 金沢文庫

北条重時家訓の研究

(千葉県立中央博物館歴史学研究科長)

## Letters of Sadaaki Kanezawa as Resources for Medical History

by Seitarô HIGUCHI

Sadaaki Kanezawa was one of the people responsible for the Kamakura Hôjô feudal government. He is considered to have been a man of high cultural sense, and greatly contributed to bringing Kanezawa Shômyôji Temple and Kanezawa Bunko to prosperity.

His letters to his family show his affection and love. He also left many letters to Ken-a, the second Elder of Kanezawa Shômyôji Temple. These letters relate the names of diseases of that time and different kinds of treatments and care, folk remedies, and the like.

They are highly valuable materials for the study of medical history in Japan.